

JLTA Newsletter No. 37

日本言語テスト学会

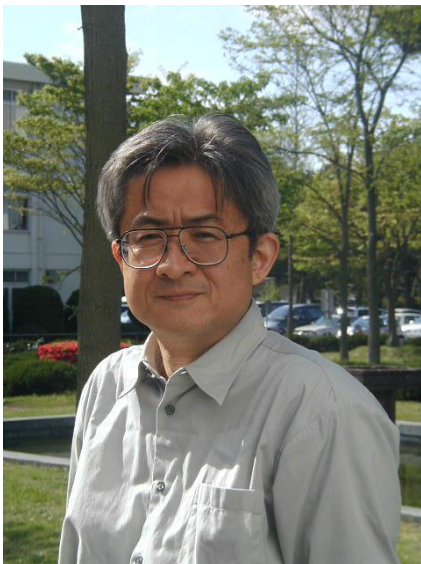
The Japan Language Testing Association

JLTA Newsletter No. 37 発行代表者: 渡部良典 2014 年 (平成 26 年) 9 月 5 日発行
発行所: 日本言語テスト学会 (JLTA) 事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1 順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室 TEL: 0476-98-1001 (代表) FAX: 0476-98-1011 (代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp URL: <https://jlta.ac>



会長就任のご挨拶

日本言語テスト学会会長
渡部 良典 (上智大学)



会員の皆様におかれましては、日頃より本学会にお力添えを賜り、深く感謝申し上げます。平成 26 (2014) 年度より会長職を引き継ぎました渡部良典と申します。1996 年 9 月に大友賢二先生を会長として産声をあげた本学会は、Randy Thrasher 先生、浪田克之介先生、中村優治先生のもと着実に発展を続けてきました。現在会員 220 名、賛助会員 10 社となり、会員数のみならず、学会誌、研究発表の内容に見られる通り質の面でも着実に向上していることは皆様ご周知のとおりです。これまでの会を引き継ぎさらに発展させるために、今後の学会運営の際に焦点を置くべきだと私が認識していることがあります。ここで皆様にお伝えして御挨拶に替えさせて頂くことといたします。

第一点は、これまで貢献してこられた会員と、これから続く研究者と、そして私たち現会員との縦の関係を改めて見直し、より一層意味のある関係を築いてゆくことです。歴史を重ねるにつれ、時間軸に沿ったコミュニケーション、縦の関係を築いてゆくことが益々重要になってきます。これは、これまで会を築いてこられた方々に敬意を表するだけでなく、広くわが国の研究史が必要となるであろうということも意味します。ここで歴史というのは、第一に本学会の歴史、第二にわが国における研究の歴史、第三に言語テスト研究実践の歴史です。言語テストの研究の濫觴をいつにおくかということについては諸説がありますが、本学会よりも先立つことは確かです。実証的な研究の歴史を辿ることが必要です。またテスト・評価の実践は研究史よりも更に長い歴史があります。実践と研究の双方をバランスよくまとめ、さらに国際的な文脈に位置付けることにより、意味のある研究が進められるはずです。

第二に、他の研究分野から多くを学びそして私たちの研究成果を提供することです。言語は人間を人間たらしめる優れた固有の能力です。その言語の測定を専門分野とする私たちには特別な義務があります。研究分野としてはたとえば第二言語習得研究に測定の方法および分析の方法を提供できる準備ができていなければなら

ません。そのためには、第二言語習得研究や、理論言語学から学ぶべきことが多々あります。同時に、他分野の方々も視野に置きながら私たちの成果をより広い範囲に公表してゆく必要があろうかと思えます。学術研究者としてまた教育の実践者として国家の政策に関わり運営することは別の領域に属します。しかし、地道に成果を発表することがすなわち公への啓蒙となるはずで

第三に、言語のテスト・評価の対象を広げる必要があります。国内でも本学会でも対象言語は外国語としての英語が圧倒的多数を占めます。英語の重要性からして当然のこととはいえ、言語の普遍性に思いを致し、そして世界各国、各言語との交流を益々盛んにするという責務が私たちの学会にはあります。特に母国語の研究と評価・テストの研究が欠けています。外国語としての諸言語、また母国語としての諸言語のテスト・評価をもっと積極的に行う必要があります。そのことが延いては国内のみならず国外への貢献ともなるはずで

学会の運営組織は、会長が下にいて、役員、委員、会員が上にいる、という逆三角形が健全な形です。とはいえ、固より非力な会長一人で支えられるべくもありません。事務局、役員、そして何より会員お一人お一人が本学会を作り上げています。着実に発展することができたのも、皆様一人ひとりのご協力があってこそ、日本言語テスト学会を学術の鍛錬の場として、互いに切磋琢磨してゆきたいものです。今後ともどうぞお力添えを宜しくお願い申し上げます。

**Report on
The 38th JLTA Research
Seminar**

Feb. 1 (Sat)

於：東海大学湘南キャンパス

**「高等教育における CLIL の実践と評価
CLIL：内容と外国語を統合した学習」**

報告者 藤田智子（東海大学）

第 38 回研究例会は、2 月 1 日、東海大学の湘南キャンパスにおいて開催された。今回のテーマである CLIL（Content and Language Integrated Learning）は、内容と言語を統合した学習のことである。これはグローバル人材育成のために最も効果的な学習方法で、今後ますます必要性が高まると目されている。

会場では、CLIL 研究の第一人者で、『CLIL 内容言語統合型学習 上智大学外国語教育の新たな挑戦』の著者である渡部良典氏が高等教育における CLIL の紹介を、また、上智大学で CLIL コースを担当していらっしゃる堀口佐知子氏が、CLIL の実践についてお話された。最後に東海大学の長沼君主氏が Can-Do リストと絡めて CLIL の評価について発表された。

渡部良典氏：2014 年春から上智大学では英語教育プログラムを CLIL コースにするが、ここに至るまでの過程を紹介して下さった。CLIL の理論に基づいてカリキュラムを構築し、先行して実施された CLIL 授業では、最後まで授業に残った学生たちに比べ、途中であきらめた学生たちはリスニング能力が低いことが明らかにされた。綿密な計画、needs-analysis、と実証実験データをもとに、ステップを踏みながら周りを説得して、ついにこのコースが実現されたことを知り感動を覚えた。

堀口佐知子氏：上智大学 CLIL コースの授業（人類学）を実際に担当してきた立場から、

CLIL の実践について説明していただいた。日本人論をテーマにした授業シラバス、振り返り、パラグラフ・ライティング、教材から実際のタスクに至るまで、教室で使用されているのと同じものを提示しつつ、学生の反応や生の声も紹介していただいた。

長沼君主氏：文部科学省の進める学習到達目標としての Can-Do リストを活用した英語教育改革の流れについても触れながら、CLIL 型の PPP(presentation-processing-production)とダイナミック・テストの発想が、CEFR における Can-Do 評価の partial competence の発想につながることや背景知識や教科知識と不可分な言語能力評価の必要性について論点が提示された。

本例会には、CLIL に関心のある学部教員、語学の教員、テストの研究者、大学院生など様々な分野の約 40 名が参加した。発表後、短い時間であったが会場との活発な質疑応答があった。

**Report on
The 39th JLTA Research
Seminar**

May 10 (Sat)

於：てんぶす那覇（那覇市）

「インハウス CAT の言語テストへの適用」

報告者 水本 篤（関西大学）

2014 年 5 月 10 日（土）に第 39 回日本言語テスト学会研究例会が、てんぶす那覇（沖縄県那覇市）で開催された。今回のテーマは「インハウス CAT の言語テストへの適用」で、沖縄での開催にも関わらず 20 名程度の参加があり、コンピュータ適応型テスト (Computerized Adaptive Testing: CAT) への関心の高さがうかがえた。

発表は合計 4 件あり、1 件目は木村哲夫氏（新潟青陵大学）による「教員にやさしい CAT、学生にやさしい CAT」であった。木村氏は長年に渡る CAT 開発経験から、難易度が高い項目が初めに出現されるアルゴリズムでは、テスト受験者の動機づけに好ましくない影響を及ぼす可能性もあるため、テストの難しさ（目標正答確率）を調整できる仕組みを CAT に組み込むべきであるという点を指摘した。そして、そのような機能を備えた M-UCAT の開発経緯と実施報告が行われた。

二件目は水本 篤（関西大学）による、「オープンソースプラットフォーム Concerto を利用したコンピュータ適応型テストの開発」で、Concerto を使った自前の CAT 作成までの経緯とその検証結果の報告が行われた。また、CAT に適した英語テストはどのようなものであるのかなど、言語テスト研究の全体像からの提言がなされた。

三件目は、秋山 實氏（e ラーニングサービス）による、「小規模な回答データでも LRT-CAT なら使える？」で、項目応答理論が適用できない小規模な回答データでもアイテムバンクを構築できるという、潜在ランク理論 (Latent Rank Theory: LRT) の利点を活かし、インハウス CAT に使用できるのかという点について、シミュレーションと実際に得られたデータから、いくつかの可能性が示された。

四件目は、今井 新悟氏（筑波大学）による、「J-CAT 開発ヒストリー」で、日本語能力を測定する CAT として公開されている J-CAT の開発経緯と、運用面での苦労などをお話いただいた。特にふりがな（ルビ）のブラウザ依存による、文字化けを防ぐために画像ファイルで処理されているということや、項目の漏洩を防ぐためにハイスタークスのテストではないということを強調されているという点などが興味深かった。

今回は CAT 作成に必要な基礎知識や、現段階でインハウス CAT がどの程度、実現可能かという点について、理解を深めることができる実りの多い研究会であった。

**日本言語テスト学会
第 4 回最優秀論文賞
受賞者のことば**
**Message from the Recipient of
The 4th JLTA Best Paper Award**

長谷川佑介（筑波大学大学院生）

2013 年度日本言語テスト学会最優秀論文の決定についてのご連絡をいただいたとき、私は驚きのあまりそのメールを少なくとも 10 回は読み返した。いや、もしかすると 20 回かもしれない。JLTA Journal No. 16 (2013) に掲載された私の論文、“Who Will Benefit From Glossed Context in Intentional Vocabulary Learning? Comparing High School and University Students”が、このようなたいへん名誉ある形で認められたことは、私にとってまさに感慨無量の出来事であった。

この論文は、高校生と大学生の EFL 学習者を対象に、英語語彙を注釈つき文脈とともに学習することの効果を検証した実験に基づいたものであり、JLTA Journal No. 13 (2010) にて報告した実験を拡張しながらより慎重な議論を目指した論文である。特に、心像性と呼ばれる概念を応用することで学習効果を多面的に検証した点などを評価していただいた。

語彙習得は訳語などを機械的に暗記するだけでは完成せず、文脈的インプットを充実させることが必要不可欠である。このことは、ある意味では当たり前の事実のようでもあるが、それを実験的に実証することは意外と難しい。特に「短い時間で一定数の目標語を集中的に学習する」というような実験パラダイムでは、文脈を与えることの効果を観察可能な形で捉えることは非常に困難であると思われた。かといって、長期にわたる学習効果を継続的に検証しようとしても、大学院生の自分には限界がある。

そこで、心像性評価の変動という新たな観点を取り入れることで、語彙の文脈内学習がもつ潜在的な学習効果を分析対象に含めることを試みたわけである。

しかし、本研究で導入した心像性評価による測定は、いわゆる典型的な語彙テストとは性質が異なるものであるため、査読者の先生方からの評価は割れるものと想定していた。査読でリジェクトされる可能性も、当然ながら視野に入れていた。そのような予想をしていたからこそ、受賞の喜びと驚きも一層大きなものとなったのである。実際には、研究の興味深さを具体的に認めていただいただけではなく、国内の英語教育の動向を踏まえて、今後の研究の位置づけについての建設的なコメントもいただくことができた。

一方、JLTA Journal に掲載されている他の論文を拝読すると、自分の研究はまだまだと感じることも多い。この度の受賞を励みに、今後、より堅実かつ独創的な研究をしていく努力をしていきたいと思う。査読者の先生方、最優秀論文表彰委員の先生方、そして筑波大学の卯城祐司先生を始めとしていつも研究を温かく応援してくださる方々に、心より感謝申し上げたい。

**海外の学会・研究会
参加報告
World Conference Reports**

Language Testing in Europe

報告者 松本佳穂子（東海大学）

学会名: **Language Testing in Europe:
Time for a New Framework**

開催日: **2013 年 5 月 27 日~29 日**

開催場所: **University of Antwerp,
Belgium**

サバティカルでヨーロッパ各地を回っていた時に参加した学会の中で、最も学ぶところが大きかったもの

として上記を紹介したい。1997 年に第一回が開催され、第二回目になるという今回は、CEFR の実践、特にそれに基づく評価についての成果や問題点を共有・議論するために、ヨーロッパを中心とする 26 ヶ国から 150 名の研究者、教員、政策立案者・推進者が参加していた。

Keynote スピーカーの一人である ECML(ヨーロッパ近代言語センター)の Martyniuk 所長によると、現在 CEFR は 40 ヶ国語に翻訳され、世界各国で指標としての使用が進んでいる。よって本学会では英語を中心にヨーロッパの様々な言語への適用に関する発表を聞くことができた。この学会がユニークだったのは、まず現在の CEFR の適用状況、特に評価面での問題点について参加者全員に事前アンケートをし、初日にその結果を開示することで問題提起を行い、2 日目、3 日目はその日の発表を受けて問題点を更に共有・議論する時間を約 1 時間ずつ取っていたところである。各国の実践例の発表を聞きつつ、問題点に対する考察を深化させ、建設的な議論へ繋げるという構成は非常に斬新で効果的であった。最初の問題提起は以下の 4 点を中心になされた。

- CEFR の Can-do 項目と言語学的理論や構成要素の関連性。特に統語や語彙に関する能力をどこまで明示できるのか？
- CEFR の各レベルを評価に使う際の難易度の峻別。学習者を特定のレベルに位置づけるために必要なエビデンスはどのようなものか？
- テストや評価の目的。得られた情報からどのような決定ができ、それはどのような社会的影響力を持つのか？
- CEFR と個別のテストの関連付け。実際の様々な評価状況において、CEFR は十分実現可能性を持つ適切な評価に使えるのか？

様々な国々からの発表に平行して、残り 3 人の Keynote スピーカーが、それぞれ興味深い論点を提供した。Lyle Bachman 氏は、自らの提唱する Assessment Use Argument の手法によって、異なる言語観と目的に基づく評価やテストを関連

付ける難しさを解説し、ベルギーの職業能力認定機関 SELOR の Etienne Devaux 氏は、CEFR に基づいた言語能力認定試験を開発する際に直面した限界と問題点について指摘した。更にアントワープ大学の Jan Hulstijn 氏は、CEFR がジャンルや状況などの多様性に十分対応できていないとし、語彙サイズではなくその多様性を指標に含めることなどを提案した。2 日目には 4 人の Keynote スピーカーがフロアーと議論する場がもたれ、上記 ECML の Martyniuk 所長が否定的な意見に対して、「CEFR がヨーロッパ全域を結ぶ革新的な試みであることには変わりがなく、それは使用者を縛るような性質のものであってはならず、今後も多様性を受け入れつつ、多くの研究や実践の成果を取り込みながら進化・発展していくべきである。」と穏やかに答えていたのが印象的であった。

最終日の最後に行われた 1 時間の「Post-reflection」においては、学会前のアンケート結果に対して、学会後の結果が瞬時に集計されて示され、参加者の意識の変化が可視化された。学会自体の問題提起であった「Time for a New Framework? (CEFR に変わる新しい枠組みが必要か?)」については、今のままで、もっと有効な実践例を蓄積・共有して、必要があれば修正して行くべきという反応が多かった。

時期的に日本からの参加者は大変少なく発表は一件もなかったが、今後日本での CEFR の適用を考える上で大変参考になる発表が多かった。特に、ピアソン社の Glyn Jones 氏の Selected Paper の発表は、実際に CEFR を基にテストを開発・検証した過程で遭遇した問題点に対して解決法を示すもので、同じような試みをする際のモデルになるであろう。

NCME 2014

報告者 齋藤英敏 (茨城大学)

大会名: The 76th Annual Meeting of
National Council on Measurement in
Education (NCME)

開催日: 2014 年 4 月 2 日~6 日

開催地: Loews Hotel, Philadelphia, PA
USA

米国の教育測定学会に初めて参加した。発表者だけで 1000 名を超えており、おそらく世界で一番大きいテスト関係の学会ではないか？もちろん中心になるのは心理測定関係のテクニカルな発表であるが、応用関係の発表も多く、それなりに楽しめることがわかった。ぎりぎりまで、キャンセルしようかと迷ったのだがやはりきてよかった。大会はフィラデルフィアのダウントウンで行われ二日間のトレーニングセッションと三日間の発表があった。自分が参加した発表に関してざっと紹介する。

Measuring “hard-to-measure” aspect of text complexity というシンポジウムでは inference の計量化 (Sheehan, K.)、自動テキスト要約システム (Nenkova, A.)、イディオムの計量化 (Feldman, A.) などこれまでできなかったことを可能にする試みが発表された。21st century skills debate というパネルディスカッションではいわゆる一般に考えられる critical thinking skills が幻であり、実際には特定分野のエキスパートスキルであると主張された (Kuncel, N.)。また Hardiman は米国での No Child Left Behind 政策以降の、学校で到達度評価・教員評価に外部テストを使用する問題点を指摘して、今の選択肢型の知識偏重のフォーマットの否定をし、パフォーマンステストの利用の再考を唱えた。大きな話題の発表は、改訂版の『Standards for Educational and Psychological Testing』に関してであった。夏に出版されるという噂で、このニュースレターが出る頃にはもう出ているかもしれない。重大な変更は fairness が validity、reliability

とならんで基本概念 (foundations) の中に入るとのことだという。

妥当性に関するシンポジウムでは、Kane をはじめとする著名な研究者が Messick の妥当性のモデルの肯定派、否定派、中間派にわかれ意見を主張したあと、聴衆との長い質疑応答をした。反対意見だからといってお互い感情的になることもなく、終始ジョークを交えた和やかなもので、改めてディベート文化に触れた気がした。Kane が最後に触れた、「妥当性みたいな語はそう簡単にコンセンサスを得る定義ができるわけなく、曖昧でいい」という達観した見方が印象に残った。

今回改めて、現在の米国の公教育での教員評価が生徒の外部到達度テスト (州が指定した業者による標準化された試験) の結果、及び授業観察などの業務評価から行われていることをきちんと理解した。しかも、テスト結果には様々な環境要因は考慮されず、観察の方法も適当に行われているという。日本がこんな過ちを起こさないように、本学会がきちんと目を光らし政策に関して助言すべきではないかと強く感じた。昨晚 (四月五日) の FOX News ではこの外部到達度試験をインディアナ州は廃止、オクラホマ州も廃止する見込み、ニューヨークでは 30,000 人の子供が受験を拒否したという。PTA のグループによると単に長時間の試験を子供が嫌がっているというだけではなく、試験での高得点だけを目指すことが子供の「学習」への態度を明らかに悪いほうへ変えているという。試験に使われる時間も驚異的だ。前述の Hardiman の発表でも子供達のテスト反対のデモの風景が見られた。

春のフィリーは気持ち良く、古い建物が多く残るすてきな歴史の町だった。こういう場所で、Kane, Brennan, Moss, Shepard, Cizek など論文や著書だけでしか知らなかった著名な研究者の発表を聞いたのも野次馬的だが嬉しかった。蛇足だが自分の発表はなんとかやり過ごせた。

海外の研究の動向 Report on Research in the World

ヨーロッパにおける最近のテスト・評価研究の動向

報告者 井上千尋

(Centre for Research in English
Language Learning and Assessment,
University of Bedfordshire, UK)

春から夏にかけ、日本でも海外でも学会シーズンとなりました。ご多忙の中、全国や海外へ足を伸ばして学会へ出席・発表される先生方も多くいらっしゃると思います。

2014 年春夏にヨーロッパで行われたテスト・評価関連の大規模な大会には、ALTE (Association of Language Testers in Europe) (パリ 4 月)、EALTA (European Association for Language Testing and Assessment) (ウォーリック 5 月)、LTRC (Language Testing Research Colloquium) (アムステルダム 6 月) があり、テーマはそれぞれ「多言語主義：言語的多様性と異文化間コミュニケーションの推進」、「CEFR と評価の今」、「Universal Framework に向けて」というものでした。やはり ALTE では、言語的多様性やそれに深く影響する評価のクオリティと公平性を取り上げました。EALTA は、公開されてから 10 年以上を経た CEFR が今どのように使われているのか、何が課題なのかということを洗い出しました。LTRC では、オーガナイザーであったデ・ヨング氏が提唱する Universal Framework (言語能力を数値で表し、単一のスケールに乗せる) がテーマでしたが、その縛りは緩めで研究発表は必ずしもこれに関するものばかりではなく、幅広いトピックが扱われました。Universal Framework は CEFR のような質的記述とラベリングを用いた枠組

みに対峙するものとして、デ・ヨング氏による講演では熱い議論がたたかわされました。それぞれの大会のフォーカスこそ違えど、やはりヨーロッパでは EU 内における教育や労働力の流動性の確保と推進という根強い課題が存在し、その言語評価ツールとして大きな影響を及ぼしている CEFR をはじめ、どのように言語能力を記述し、評価していくのかが模索されながら研究が進んでいます。

さらに、より具体的なテスト研究の動向を把握するには、テスト機関が募集する研究資金のテーマや、資金獲得者の研究テーマを一覧するのが良いでしょう (これはヨーロッパに限られませんが)。テーマの候補は実に多岐にわたりますので、ここですべてを紹介することはできませんが、個人的には技術革新に伴うテーマ設定や研究の方法論を要求するものがトレンドのように感じています。たとえば、ブリティッシュ・カウンシルは、新しく CBT の Aptis を開発してからその検証をパフォーマンスの質的分析、波及効果、モード間の違いなどの面から積極的に行うプロジェクトを奨励しています。テーマ自体は目新しいものではなくとも、コンピューターや録音、情報伝達技術のめざましい発達により、今だからこそ可能になったことや、今だから hot になっているトピックが組み合わさった形になっていると思います。

また、ケンブリッジからも、ちょうど最近 2015 年度向けの研究資金プロジェクト募集要項が発表されました。まず目を引くのは、「受験者の認知プロセス」です。これは、ETS の TOEFL 研究資金募集要項でも挙げられていたものです。これも、今だからこそ可能になった録音技術、分析ソフトウェアなどを用いて、今までは敬遠されてきた「受験者の頭の中で何が起きているのか」ということに光を当てるテーマです。たとえば、リーディング研究でコンピューターと併用した invasive でない眼球運動追跡装置 (eye-tracker) の使用が可能になったことなどはまさに革新的であり、これによって研究の限界が大きく広がりました。実施でも研究の面でも、practicality がネックであるスピーキングにおいても、録音技術や質的データ分析ソフトウェアの発展により、verbal protocol や stimulated recall など

によるデータを合わせて、より正確に認知プロセスを解明する研究が、今後ますます増えていくと予想されます。

短報 Bulletin Board

本学会の第二代会長を務められた Randy Thrasher 氏(国際基督教大学名誉教授)が長年に渡る言語テスト分野への国際的貢献が認められブリティッシュ・カウンシルの International Assessment Award を受賞され、オランダで行われた 2014 Language Testing Research Colloquium で授賞式が行われた。Thrasher 先生、おめでとうございます！

JLTA 各委員会より連絡 News from JLTA Committees

研究会運営委員会より

第 18 回（2014 年度）全国研究大会開催。
日程：2014 年 9 月 20 日（土）-21 日（日）
会場：立命館大学 びわこ・くさつ キャンパス（BKC）（〒525-8577 滋賀県草津市野路東 1 丁目 1-1）
大会の詳細は、JLTA ウェブサイトを参照のこと。

事務局より

JLTA の活動にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。ご質問・ご意見等ございましたらお寄せください。

- (1) 2014 年度 4 月から事務局が順天堂大学に移転し、学会事務の業務委託を開始しました。会員情報や会費納入状況が確認できる「マイページ（<https://www.bunken.org/jlta>

/mypage/Login）」を公開し、会員向けページにおいてニュースレターなどの発信を積極的に行っていく予定です。

これらの移行に伴い、ご迷惑をおかけした場合もございました。関係者の皆様にご迷惑をおかけいたしましたことを、ここにお詫びさせていただければと思います。

- (2) 2014 年度の会費振込について、まだの方は早急によりしくお願いいたします。6 月に送付した払込取扱票をお使いいただくか、以下の新しい口座にお振込みください。

■郵便局の払込取扱票にてお振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行（金融機関コード：9900）
預金種目：当座
加入者名：日本言語テスト学会
口座番号：00190-8-764781

■ゆうちょ銀行および他の金融機関からのお振込の場合

銀行名：ゆうちょ銀行
金融機関コード：9900
店番：019
預金種目：当座
店名：〇一九 店（ゼロイチキウ店）
口座番号：0764781
口座名義：日本言語テスト学会

- (3) 第 18 回全国研究大会の準備が、全国研究大会実行委員長の清水裕子先生（立命館大学）と全国研究大会運営委員長の印南洋先生（芝浦工業大学）を中心に進んでいます。今年は、毎年交流がある Korea English Language Testing Association (KELTA) からの発表者も 2 件を含む研究発表が 25 件、（今年から設けられた）賛助会員発表が 5 件あります。発表要綱は 8 月中に JLTA のホームページ（<https://jlta.ac/>）

に掲載します。

発表要綱を学会前に郵送でお届けしてまいりましたが、今年から発表要綱は受付で配布します。『要綱』は事前に郵送しませんので、適宜ご印刷ください。

- (4) JLTA は 1996 年に設立され、2015 年に 20 周年を迎えます。全国研究大会は 1997 年から開始され、2016 年が第 20 回大会となります。それらの 20 周年記念に向けた計画を、運営委員会を中心に行っているところです。詳細が決まりましたら、総会や Newsletter 等でお知らせいたします。

JLTA 事務局長 小泉 利恵 (順天堂大学)

Announcement from the Secretariat

We are thankful for your understanding of and commitment to JLTA's activities. Please send us any comments or inquiries you may have.

- (1) In April 2014, the Secretariat moved to Juntendo University and started outsourcing some of the business management. We created a "My Page" site (<https://www.bunken.org/jlta/mypage/Login>) where you can check and modify your membership information and check your yearly membership fee payment. We are planning to actively display newsletters and other materials specifically for members.

There were cases where some disruptions occurred along with these changes. We would like to extend our apologies to those who were affected.

- (2) If you have not paid the yearly membership fee for 2014, please do so at the earliest. Please use a

payment slip sent by post in June or transfer the fee to JLTA's new bank account (see below) via direct deposit.

When you use a payment slip:

銀行名：ゆうちょ銀行(金融機関コード：9900)

預金種目：当座

加入者名：日本言語テスト学会

口座番号：00190-8-764781

When you making a direct transfer to JLTA's bank account:

銀行名：ゆうちょ銀行 (Japan Post Bank)

金融機関コード (bank code) : 9900

店番 (branch code) : 019

預金種目 (deposit type) : 当座 (current account)

店名：〇一九 店 (ゼロイチキウ店)

口座番号 (account number) : 0764781

口座名義 (account holder) : Japan Language Testing Association

- (3) Our preparation for the 18th Annual Conference of the Japan Language Testing Association is making steady progress thanks to great contributions from Yuko SHIMIZU (Conference Chair; Ritsumeikan University) and Yo IN'NAMI (Research Meeting Committee Chair; Shibaura Institute of Technology). We will have 25 paper presentations, including two from delegates from the Korea English Language Testing

(4) Association (KELTA) and five institutional member presentations (started this year). We will post a conference handbook to the JLTA website (<https://jlta.ac/>) in August.

Although we have previously mailed out the conference handbook before the conference, this year, we are going to distribute it at the registration desk. We will not mail it in advance. Please print it out if necessary.

(5) JLTA was founded in 1996; next year, we will be 20 years old. The annual conference started in 1997, and we will have the 20th anniversary conference in 2016. The Steering Committee is planning some anniversary activities. We will announce the details at business meetings or in newsletters.

**Rie KOIZUMI (JLTA Vice Secretary
General, Juntendo University)**

＜編集後記＞

さて、記念すべき最初の電子ファイルのみのニュースレターである。脱紙媒体にはいろいろご意見もあるだろうが、時代の趨勢で、これは避けられない。本学会の進歩として個人的には歓迎したい。(HS)

次のような原稿を募集しておりますのでどうぞお寄せください。1) 海外学会報告、2) 書評、3) 研究ノート、4) 意見、またその他当学会員の興味関心に沿うもの。



日本言語テスト学会事務局
〒270-1695 千葉県印西市平賀学園台 1-1
順天堂大学さくらキャンパス
小泉利恵研究室
TEL: 0476-98-1001(代表)
FAX: 0476-98-1011(代表)
e-mail: rie-koizumi@mwa.biglobe.ne.jp
URL: <https://jlta.ac>

編集： 広報委員会
委員長 長沼君主（東海大学）
副委員長 笠原 究（北海道教育大旭川校）

委員
飯村英樹（熊本県立大学）
片桐一彦（専修大学）
齋藤英敏（茨城大学）
佐藤臨太郎（奈良教育大学）
宮崎 啓（慶応義塾高等学校）